

喫煙四十年

寺田寅彦

青空文庫

はじめて煙草を吸ったのは十五、六歳頃の中学時代であった。

自分よりは一つ年上の甥おいのRが煙草を吸って白い煙を威勢よく両方の鼻あなの孔から出すのが珍うらやしく羨うらやましくなつたものらしい。その頃同年輩の中学生で喫煙するのはちつとも珍うらやしくなかつたし、それに父は非常な愛煙家であつたから両親の許可を得るには何の困難もなかつた。皮製で財布のような恰かつこう好かつこうをした煙草入れに真しんち鍬ゆうの鉋なた豆たまめ煙管きせるを買つてもらつて得意になつていた。それからまた胴どうらん乱どうらんと云つて桐きりの木を削くり抜いて印いんろう籠形いんろうにした煙草入れを竹の煙管筒にぶら下げたのを腰に差すことが学生間に流行はやつていて、喧嘩好きの海南健児の中にはそれを一つの攻防の武器と心

得ていたのもあつたらしい。とにかくその胴乱も買ってもらつて嬉しがつていたようである。

はじめのうちは煙を咽喉^{のど}へ入れるとたちまち噎^むせかえり、咽喉も鼻の奥も痛んで困つた、それよりも閉口したのは船に酔つたように胸が悪くなつて吐きそうになつた。便所へ入つてしゃがんでいると直ると云われてそれを実行したことはたしかであるが、それがどれだけ利いたかは覚えていない。それから、飯を食うと米の飯が妙に苦くて脂^{やに}を嘗^なめるようであつた。全く何一つとして好いことはなかつたのに、どうしてそれを我慢してあらゆる困難を克服したか分りかねる。しかしとにかくそれに打勝つて平気で鼻の孔から煙を出すようにならないと一人前になれないような気が

したことはたしかである。

煙草はたしか「極上国分」と赤字を粗末な木版で刷った紙袋入りの刻煙草であつたが、勿論国分で刻んだのではなくて近所の煙草屋できざんだものである。天井から竹竿で突張った鉋のようなものでごしりごしりと刻んでいるのが往来から見えていた。考えてみると実に原始的なもので、おそらく煙草の伝来以来そのままの器械であつたらうと思われる。

農夫などにはまだ燧袋で火を切り出しているのがあつた。それが羨ましくなつて真似をしたことがあつたが、なかなか呼吸が六かしくて結局は両手の指を痛くするだけで十分に目的を達することが出来なかつた。神棚の燈明をつけるために使う燧

金^{かね}には大きな木の板片が把手^{とって}についているし、ほくちも多量にあるから点火しやすいが、喫煙用のは小さい鉄片の頭を指先で^{つま}抓着で打ちつけ、その火花を石に添えたわずかな火口^{ほくち}に点じようとするのだから六かしいのである。

火の消えない吸^{すい}殻^{がら}を掌^{てのひら}に入れて転がしながら、それで次の一服を吸付けるといふ芸当も真似をした。この方はそんなに六かしくはなかつたが時々はずいぶん痛い思いをしたようである。やはりそれが出来ないと一人前の男になれないような気がしたものらしい。馬鹿げた話であるが、しかしこの馬鹿げた気持がいつまでも抜け切らなかつたおかげでこの年まで六かしい学問の修業をつづけて来たかもしれない。

羅^ら宇^おの真中を三本の指先で水平に支えて煙管を鉛^{えん}直^ち軸^{よく}のまわりに廻^ま転^{てん}させるという芸当も出来ない幅が利かなかつた。これも馬鹿^{ばか}げているが、後年器械などいじるための指の訓練にはい^いくらかなつたかもしれない。人差指に雁^{がん}首^{くび}を引掛^ひけてぶら下げ^げておいてから指で空中に円^{えん}を画^えきながら煙管をプロペラのごとく廻^ま転^{てん}するという曲芸は遠心力の物理を教わらない前に実験だけは卒業^{そつぎょう}していた。

いつも同じ羅^ら宇^お屋^やが巡^{めぐ}廻^まして来た。煙草は専^{せん}売^{ばい}でなかつた代りに何の商売にもあまり競争者のない時代であつたのである。その羅^ら宇^お屋^やが一風変^{へん}つた男^{おとこ}で、小柄^{せうがら}ではあつたが立派^{りつぱ}な上品^{じやうひん}な顔^{かほ}をしていて言葉^{ことば}使^{つか}いも野卑^{のひ}でなく、そうしてなかなかの街頭^{かど}哲^{てつ}学^{がく}者^{しや}で、

いろいろ面白いリマークをドロップする男であった。いつもバンドのとれたよごれた鼠色のフェルト帽を目深まぶかに冠かぶっていて、誰も彼の頭の頂上に髪があるかないかを確かめたものはないという話であった。その頃の羅宇屋は今のようてんびんぼうにピーピー汽笛を鳴らして引いて来るのではなくて、天秤棒てんびんぼうで振り分けに商売道具をかつて来るのであったが、どんな道具があつたかはつきりした記憶がない。しかしいずれも先祖代々百年も使い馴らしたようなものばかりであつた。道具も永く使い馴らして手擦れのしたものには何だか人間の魂がはいっているような気がするものであるが、この羅宇屋の道具にも実際一つ一つに「個性」があつたようである。なんでも赤鏽あかさびた鉄火鉢に炭火を入れてあつて、それで煙管やにの脂

を掃除する針金を焼いたり、また新しい羅宇竹を挿込む前にその端をこの火鉢の熱灰あつはいの中にしばらく埋めて柔らかげたりするのであった。柔らかげた竹の端を櫛かの樹の板に明けた円い孔へ挿込んでぐいぐい捻ねじる、そうしてだんだんに少しずつ小さい孔へ順々に挿込んで責めて行くと竹の端が少し縊くびれて細くなる。それを雁首に挿込んでおいて他方の端を拍子木の片つ方みたような棒で叩き込む。次には同じようにして吸すいくち口の方を嵌はめ込み叩き込むのであるが、これを太鼓のばちのように振り廻す手付きがなかなか面白い見物であった。またそのきゅんきゅんと叩く音が河向いの堀に反響したような気がするくらい鮮明な印象が残っている。そうして河畔に茂った「せんだん」の花がほろほろこぼれているよう

な夏の日盛りの場面がその背景となつているのである。

父はいろいろの骨董道楽をしただけに煙草道具にもなかなか凝つたものを揃えていた。その中に鉄煙管の吸口に純金の口金の付いたのがあつて、その金の部分だけが螺旋ねじで取り外ずしの出来るようになつていた。羅宇屋に盗まれる恐れがあるので外ずして渡す趣向になつていたものらしい。子供心に何だかそれが少しぎこちなく思われた。そのせいでもないが自分は今日まで煙管に限らず時計でもボタンでも金や白金の品物をもつ気がしなかつた。

巻煙草を吸い出したのもやはり中学時代のずっと後の方であつたらしい。宅うちには東京平河町ひらかわちょうの土田という家で製した紙巻がいつも沢山に仕入れてあつた。平河町は自分の生れた町だからそ

れが記憶に残っているのである。ピンヘッドとかサンライズとか、その後にはまたサンライトというような香料入りの両切紙巻が流行し出して今のバットやチェリーの先駆者となった。そのうちのどれだったかた東京の名妓の写真が一枚ずつ紙函かみぼこに入れてあって、ぼん太とかおつまとかいう名前が田舎の中学生の間にも広く宣伝された。煙草の味もやはり甘ったるい、しつっこい、安香水のよくな香のするものであったような気がする。

今の朝日敷島の先祖と思われる天狗煙草の栄えたのは日清戦争以後ではなかったかと思う。赤天狗青天狗銀天狗金天狗という順序で煙草の品位が上がって行ったが、その包装紙の意匠も名に相応ふさわしい俗悪なものであった。轡くつわの紋章に天狗の絵もあったよう

に思う。その俗衆趣味は、ややもすればウエルテリズムの阿片あへんに酔う危険のあつたその頃のわれわれ青年の眼を現実の俗世間に向けさせる効果があつたかもしれない。十八歳の夏休みに東京へ遊びに来て、おわりちよう尾張町のI家に厄介になつていた頃、銀座通りを馬車で通る赤服のいわやてんぐまつへい岩谷天狗松平氏を見掛けた記憶がある。銀座二丁目辺の東側に店があつて、赤塗壁の軒の上に大きな天狗の面がその傍若無人の鼻を往来の上に突出していたように思う。松平氏は第二夫人以下第何十夫人までを包括する日本一の大家族の主人だといふゴシップも聞いたが事實は知らない。とにかく今日のいわゆるファイティング・スピリットの旺盛な勇士であつて、今日から一部の人士の尊敬の的になつたであらうに、惜しいことに少し

時代が早過ぎたために、若きウエルテルやルディン達にはひどく毛嫌いされたようであった。

先^{せんだっ}達て開かれた「煙草に関する展覧会」でこの天狗煙草の標本に再会して本当に涙の出る程なつかしかったが、これはおそらく自分だけには限らないであろう。天狗がなつかしいのでなくて、その頃の我が環境がなつかしいのである。

官製煙草が出来るようになったときの記憶は全く空白である。しかし西洋で二年半暮して帰りに、シヤトルで日本郵船丹波丸に乗って久し振りに吸った敷島が恐ろしく紙臭くて、どうしてもこれが煙草とは思われなかった、その時の不思議な気持だけは忘れることが出来ない。しかしそれも一日経ったらすぐ馴れてしまっ

て日本人の吸う敷島の味を完全に取り戻すことが出来た。

ドイツ滞在中はブリキ函かんに入った「マノリ」というのを日常吸っていた。ある時下宿の老嬢フロイライン・シユメルツァー達と話していたら、何かの笑じょうだん談を云つて「エス・イスト・ヤー・マノリ」というから、それは何の事だと聞いてみると、「馬鹿げた事だ」という意味の流行語だという。どういう訳で「マノリ」が「馬鹿なこと」になるかと聞いてみたが要領を得なかつた。その後この疑問を遙々はるばる日本へ持つて歸つて仕舞い込んで忘れていた。専売局の方々にでも聞いてみたら分るかもしれないが、事によると、これは自分がちよつとかつがれたのかもしれない。

ドイツは葉巻が安くて煙草好きには楽土であつた。二、三十片ペニヒ

で相当なものが吸われた。馬車屋クツチャーや労働者の吸うもつと安い葉巻で、吸口の方に藁切れわらぎが飛び出したようなのがあったがその方は試ためした事がない。

ベルリンの美術館などの入口の脇の壁面に数寸角の金属板が蠟ろう燭うそく立たてかなんかのように飛出しているのを何かと思つたら、入場者が吸いさしのシガーを乗つけておく棚であつた。点火したのをそこへ載せておくと少しばらく時じすると自然に消えて主人が観覧を了おえて再び出現するのを待つ、いわばシガーの供待部屋ともまちべやである。これが日本の美術館だつたらどうであろう。這はい入るときに置いた吸いさしが、出るときにその持主の手に返る確率が少なくも一九一〇年頃のベルリンよりは少ないであろう。しかし大戦後のベルリン

でこのシガラの供待所がどういふ運命に見舞われたかはまだ誰からも聞く機会がない。

ベルリンでも電車の内は禁煙であつたが車掌台は喫煙者ラウハーのために解放されていた。山高帽を少し阿弥陀あみだに冠かぶつた中年の肥大ふとつた男などが大きな葉巻をくわえて車掌台に凭もたれている姿は、その頃のベルリン風俗画の一景であつた。どこかのんびりしたものであつたが、日本の電車ではこれが許されない。いつか須田町すだちょうで乗換えたときに気まぐれに葉巻を買つて吸付けたばかりに電車を棄権して日本橋まで歩いてしまった。夏目先生にその話をしたら早速その当時書いていた小説の中の点景材料に使われた。須永といふあまり香かんばしからぬ役割の作中人物の所業としてそれが後世に

伝わることになってしまった。そのせいではないが往来で葉巻を買って吸付けることはその時限りでやめてしまった。

ドイツからパリへ行ったら葡萄酒が安い代りに煙草が高いので驚いた。聞いてみると政府の専売だからということであった。パリからロンドンへ渡ってそこで日本からの送金を受取るはずになっており、従ってパリ滞在中は財布の内圧が極度に低下していたので特に煙草の専売に好感を有^もち損なったのであろう。マツチも高かったと思うが、それよりもマツチのフランス語を教わって来るのを忘れていたためにパリへ着いて早速当惑を感じた。ドイツで教わったフランス語の先生が煙草を吸わないのがいけなかったらしい。とにかく金がないのに高い煙草を吸い、高いマロン・グ

ラセーをかじったのが崇たたつたと見えて、今日でも時々、西洋に居て金が無くなって困る夢を見る。大抵胃の工合ぐあいの悪いときであるらしいが、そういう夢の中ではきまつて非常に流暢りゅうちようにドイツ語がしゃべれるのが不思議である。パリで金が少ないのと、言葉が自由でないのと両方で余計な神経を使ったのが脳髓のどこかの隅に薄いしみのように残っているものと見える。心理分析研究家の材料にこの夢を提供する。

西洋に在る間はパイプは手にしなかつた。当時ドイツやフランスではそんなに流行はやつていなかつたような気がする。ロンドンの宿に同宿していた何とかいふ爺さんが、夕飯後ストーヴの前で旨うまそうにパイプをふかしながら自分等の一行の田所氏を捉つかまえて、

ミスター・ターケドーロと呼びかけてはしきりにアイルランド問題を論じていた。このターケドーロが出ると日本人仲間は皆笑い出したが、爺さんには何が可笑おかしいのか見当が付かなかつたに相違ない。

アインシュタインが東京へ来た頃からわれわれ仲間の中でパイプが流行し出したような気がする。しかしパイプ道楽は自分のような不精者には不向きである。結局世話のかからない「朝日」が一番である。

煙草の一番うまいのはやはり仕事に手をとられてみつしり働いて草くたび臥れたあとの一服であろう。また仕事の合間の暇を盗んでの一服もそうである。学生時代に夜更ふけて天文の観測をやらされた

時など、曆表を繰って手頃な星を選び出し、望遠鏡の度盛を合わせておいて、クロノメーターの刻音を数えながら目的の星が視野に這入って来るのを待っている、その際きわどい一、二分間を盗んで吸付ける一服は、ことに凍るような霜夜もようやく更けて、そろそろ腹の減つて来るときなど、実に忘れ難い不思議な慰安の靈藥であつた。いよいよ星が見え出しても口に銜くわえた煙草を捨てないで望遠鏡を覗のぞいていると煙が直上して眼を刺戟し、肝心な瞬間に星の通トランシット過を読み損なうようなことさえあつた。後にはこれに懲こりて、いよいよという時の少し前に、眼は望遠鏡に押付けたまま、片手は鉛筆片手は観測簿で塞がっているから、口で煙草を吹き出して盲目捜しに足で踏み消すというきわどい芸当を演じた。

火事を出さなかつたのが不思議なくらいである。

油絵に凝こつていた頃の事である。一通り画面を塗りつぶして、さて全体の効果をよく見渡してからそろそろ仕上げにかかろうと、いうときの一服もちよつと説明の六むつかしい靈妙な味のあるものであつた。要するに真劍にはたらいたあとの一服が一番うまいということになるらしい。閑ひまで退屈してのむ煙草の味はやはり空虚なような気がする。

煙草の「味」とは云うもの、これは明らかに純粹な味覚でもなく、そうかと云つて普通の嗅きゆう覚かくでもない。舌や口蓋や鼻腔粘びんこう膜まくなどよりもつと奥の方の咽喉の感覚で謂いわば煙覚とでも名づべきもののような気がする。そうするとこれは普通にいわゆる

五官の外の第六官に数えるべきものかもしれない。してみると煙草をのまない人はのむ人に比べて一官分だけの感覚を棄権している訳で、眼の明いているのに目隠しをしているようなことになるのかもしれない。

それはとにかく煙草をのまぬ人は喫煙者に同情がないということだけはたしかである。図書室などで喫煙を禁じるのは、喫煙家にとつては読書を禁じられると同等の効果を生じる。

先年胃をわずらつた時に医者から煙草を止めた方がいと云われた。「煙草も吸わないで生きていたつてつまらないから止さな^よい」と云つたら、「乱暴なことを云う男だ」と云つて笑われた。もしあの時に煙草を止めていたら胃の方はたしかによくなつたか

もしれないが、その代りにとうに死んでしまったかもしれないという気がする。何故だか理由は分らないが唯そんな気がするのである。

煙草の効能の一つは憂苦を忘れさせ癩かんしゃくの虫を殺すにあるであろうが、それには巻煙草よりはやはり煙管の方がよい。昔自分に親しかつたある老人は機嫌が悪いと何とも云えない変な咳払いをしては、煙管の雁首で灰吹をなぐり付けるので、灰吹の頂上がいいつも不規則な日本アルプス形の凸凹を示していた。そればかりでなく煙管の吸口をガリガリ噛むので銀の吸口が扁ひらたくひしやげていたようである。いくら歯が丈夫だとしてもあんなに噛みひしやくには口金の銀が相当薄いものでなければならなかつたと考

えられる。それはとにかく、この老人はこの煙管と灰吹のおかげで、ついぞ家族を殴打したこともなく、また他の器物を打毀す^{うちこわ}こともなく温厚篤実な有徳の紳士として生涯を終ったようである。ところが今の巻煙草では灰皿を叩いても手ごたえが弱く、紙の吸口を噛んでみても歯ごたえがない。尤も映画などで見ると今の人はそのような場合に吸^{すい}殻^{がら}で錐^{きり}のように灰皿の真中をぎゅうぎゅう揉^もんだり、また吸殻をやけくそに床に叩きつけたりするようである。あれでも何もしないよりはましであろう。

自分は近来は煙草で癩癩をまぎらす必要を感じるような事は稀であるが、しかしこの頃煙草の有難味^{ありがたみ}を今更につくづく感じるのは、自分があまり興味の無い何々会議といったような物々しい

席上で憂鬱になつてしまつた時である。他の人達が天下国家の一大事であるかのごとく議論している事が、自分には一向に一大事のごとく感ぜられないで、どうでもよい些末さまつな事のように思われる時ほど自分を不幸に感じることはない。最も重要な会議がナンセンスの小田原会議のごとく思われるというのはこれはたしかにそう思う自分が間違つているに相違ないからである。

そういう憂鬱に襲われたときには無闇に煙草を吹かしてこの憂鬱を追払うように努力する。そういう時に、口からはなした朝日の吸口を綠色羅紗ラシヤの卓布に近づけて口から流れ出る真白い煙をしばらくたらししていると、煙が丸く拡がりはするが羅紗にへばり付いたようになって散乱しない。その「煙のビスケット」が生物の

ように緩やかに揺曳ようえいしていると思うと真中の処くわいが慈姑くわいの芽のよ
うな形に持上がってやがてきりきりと竜巻のように巻き上がる。
この現象の面白さは何遍繰返しても飽きないものである。

物理学の実験に煙草の煙を使ったことはしばしばあった。こと
に空気を局部的に熱したときに起る対流渦動の実験にはいつもこ
れを使っていたが、後には線香の煙や、塩酸とアンモニアの蒸気
を化合させて作る塩化アンモニアの煙や、また近頃は塩化チタン
の蒸気に水蒸気を作用させて出来る水酸化チタンの煙を使ったり
している。これはいわゆる無鉛むえんおしろい白粉を煙にしたようなものであ
る。こういう煙に関して研究すべき科学的な問題が非常に多い。
膠質こうしつ化学の方面からの理論的興味は別としても実用方面からの

研究もかなり多岐にわたって進んではいるがまだ分らないことだらけである。国家の非常時に対する方面だけでも、煙幕の使用、空中写真、赤外線通信など、みんな煙の根本的研究に拠らなければならぬ。都市の煤煙問題、鉾山の煙害問題みんなそうである。灰吹から大蛇を出すくらいはなんでもないことであるが、大蛇は出てもあまり役に立たない。しかし鉾山の煙突から採れる銅やビスマスや黄金は役に立つのである。

尤も喫煙家の製造する煙草の煙はただ空中に散らばるだけで大概あまり役には立たないようであるが、あるいは空中高く昇って雨滴凝結の心核にはなるかもしれない。午前に本郷で吸った煙草の煙の数億万の粒子のうちの一つくらいは、午後に日比谷で逢っ

た驟雨の雨滴の一つに這入っているかも知れないであろう。

喫煙家は考えようでは製煙機械のようなものである。一日に紙巻二十本の割で四十年吸ったとすると合計二十九万二千本、ざつと三十万本である。一本の長さ八・五センチとして、それだけの朝日を縦につなぐと二四八二〇メートル、ざつと六里で思った程でもない。煙の容積にしたらどのくらいになるか。仮りに巻煙草一センチで一リートの濃い煙を作るとする、そうして一本につき三センチだけ煙にするとして、三十万本で九十万リートル、ざつと見て十メートル四角のものである。製煙機械としての人間の能力はあまり威張れたものではないらしい。

しかし人間は煙草以外にもいろいろの煙を作る動物であつて、

これが他のあらゆる動物と人間とを区別する目標になる。そうして人間の生活程度が高ければ高いほど余計に煙を製造する。蛮地では人煙が稀薄であり、しゅうらく聚落の上に煙の立つのは民の竈たみかまどの賑わえる表徴である。現代都市の繁栄は空気の汚濁の程度で測られる。軍国の兵力の強さもある意味ではどれだけ多くの火薬やガソリンや石炭や重油の煙を作り得るかという点に關係するように思われる。大砲の煙など煙のうちでもずいぶん高価な煙であろうと思うが、しかし国防のためなら止むを得ないラキジュリーであろう。ただ平時の不注意や不始末で莫大な金を煙にした上に沢山の犠牲者を出すようなことだけはしたくないものである。

これは余談であるが、一、二年前のある日の午後煙草を吹かし

ながら銀座を歩いていたら、無帽の着流し但し人品賤いやしからぬ五十恰好の男が向うから来てにこにこしながら何か話しかけた。よく聞いてみると煙草を一本くれないかというのである。丁度持合せていたMCCかなんかを進呈してマッチをかしてやったら、

「や、こりゃあ有難う有難う」と何遍もふり返っては繰返しながら行過ぎた。往来の人が面白そうににこにこして見ていた。甚だ平凡な出来事のようにでもあるが、しかしこの事象の意味がいまになっても、どうしても自分には分らない。つまらないようで実に不思議なアドヴェンチュアーとして忘れることが出来ないのである。もし読者のうちでこの謎の意味を自分の腑ふに落ちるようにはつきり解説してくれる人があつたら有難いと思うのである。

(昭和九年八月『中央公論』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第四卷」岩波書店

1997（平成9）年3月5日発行

初出：「中央公論」

1934（昭和9）年8月

入力：Nana ohbe

校正：浅原庸子

2005年5月7日作成

2009年9月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

喫煙四十年

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>